

令和 6 年 5 月 31 日現在

機関番号：14401

研究種目：基盤研究(C)（一般）

研究期間：2016～2023

課題番号：16K02673

研究課題名（和文）バリ語山地方言の会話コーパスと語彙データベースの構築

研究課題名（英文）Construction of conversational corpus and lexical database of Balinese Mountain Dialect

研究代表者

原 真由子（Hara, Mayuko）

大阪大学・大学院人文学研究科（外国学専攻、日本学専攻）・教授

研究者番号：20389563

交付決定額（研究期間全体）：（直接経費） 3,400,000 円

研究成果の概要（和文）：本研究は、インドネシア共和国バリ州におけるバリ語山地方言社会の特徴をふまえた組織的な会話コーパスを構築した上で、言語外の要素と言語構造、言語使用の相互作用を自然会話に基づき考察し、またバリ語山地方言に影響を与えるバリ語標準方言であるバリ語平地方言と国語インドネシア語の混在の傾向と分布を考察した。そして、会話や談話に現れる語彙を収集済みの山地方言語彙に追加し、山地方言に特徴的な文化語彙を含む、また言語外の要素と言語の関係およびコード混在や借用などの社会言語学的変化に関する情報を盛り込んだ、山地方言語彙データベースの編纂も行った。

研究成果の学術的意義や社会的意義

本研究の意義は、従来方言地理学的な観点からバリ語平地方言との言語構造の違いに焦点が当てられてきた山地方言研究の文脈に、社会言語学的な視点を取り入れる点にある。つまり、会話と語彙の収集によって、山地方言の言語構造的特徴を平地標準方言と対比して考察すると同時に、標準方言やインドネシア語の干渉といった社会言語学的変化を記述することにある。

研究成果の概要（英文）： This study constructed an organized conversational corpus based on the characteristics of the Balinese Mountain dialect (BM dialect) society in Bali, Indonesia, and examined the interaction between extralinguistic elements, language structure, and language use based on natural conversation, as well as the tendency and distribution of the mixing of Balinese Lowland dialect (BL dialect), a standard dialect of Balinese, and National Language Indonesian. The study also examines the tendency and distribution of the mixing of BL dialect and Indonesian, affecting the BM dialect. The vocabulary that appears in conversation was added to the already collected BM dialect vocabulary, and a database of BM dialect vocabulary was compiled, including cultural vocabulary characteristic of BM dialect and information on the relationship between language and extralinguistic elements and sociolinguistic changes such as code mixing and borrowing.

研究分野：社会言語学

キーワード：社会言語学 バリ語 インドネシア語

### 1. 研究開始当初の背景

バリ語山地方言の研究は、従来のバリ語方言地理学的研究の文脈で平地方言との対照によって言語構造を考察していたが、その背景にあるバリ語山地方言社会に本質的な社会構造、宗教儀礼、文化慣習といった言語外の諸要素との関係から見る視点が欠けていた。そのため、山地方言社会に特徴的な文脈や設定を含む様々な状況・領域における会話・談話を収集、記述した上で、そこに見られる言語構造と言語外の要素の関係を観察し、山地方言の社会言語学のおよび語用論的な知識を明らかにする必要があった。

### 2. 研究の目的

バリ語の2大方言のうちマイナー方言である山地方言の研究は、方言地理学的研究の文脈でバリ語の標準方言である平地方言との言語構造的差異に焦点が当てられてきたが、本研究はその背景にある社会構造、宗教儀礼など山地方言社会の言語外の要素の方により注目し研究することが目的である。具体的には、山地方言社会の特徴をふまえた組織的な会話コーパスを構築した上で、言語外の要素と言語構造、言語使用の相互作用を自然会話に基づき考察する。また、山地方言に影響を与える平地方言とインドネシア語の混在の傾向と分布も観察する。そして、会話に現れる語彙を収集済みの基礎語彙に加え、山地方言に特徴的な文化語彙を含む、言語外の要素と言語の関係、コード混在などの社会言語学的変化に関する情報を盛り込んだ山地方言語彙データベースを編纂する。

### 3. 研究の方法

まず今まで構築してきた山地方言語彙リストをもとにした語彙データベースの雛形の作成、山地方言会話資料の組織的収集のための予備調査を中心に行う。その上で、会話の組織的な収集と記述を進め、入手済みの会話と合わせ、山地方言の会話コーパスを構築する。それらの会話をもとに、言語外の要素と言語構造、言語使用の相互作用について考察し、また平地方言とインドネシア語の混在の傾向と分布も明らかにする。そして、会話に現れる山地方言語彙を収集済みの語彙に加え、言語外の知識および社会言語学的変化に関する情報を盛り込んだ山地方言語彙データベースを構築する。

### 4. 研究成果

バリ語山地方言地域であるバリ州ブレレン県プダワ村で収集した、語彙および会話データを整理し、記述するという作業を進めた。また、それらと関連する村の社会構造、儀礼や行事、慣習といった言語外の事象について、画像・映像を含め、調査中に得られたデータを整理し、その内容を文化語彙の記述に反映させた。

研究期間全体を通じて、本研究の中心課題である、バリ語山地方言社会の文化的特徴と言語の関係の探求に必要な土台の整備がある程度進み、本研究の目的の重要な部分は達成したと言える。個別の成果は以下の通りである。

- (1) 本研究はバリ語山地方言を対象にするものであるが、それに影響を与えうるバリ語平地方言を比較の対象とし、インドネシア語優勢のバリ語会話におけるコード混在を考察した。その結果、人称代名詞、指示代名詞、副詞といった句あるいは文全体にかかるバリ語要素がインドネシア語とのコード混在の中で「バリ語らしさ」を表しているという仮説を提案した(原2016、2017)。一方、山地方言の会話コーパスにおいては、現時点ではインドネシア語優勢のコード混在会話は見られず、バリ語山地方言優勢の会話が圧倒的に多い。バリ語平地方言

の干渉と合わせて、インドネシア語の借用とコード混在についてより詳細に考察する必要がある。

- (2) バリ語山地方言と平地方言の大きな違いの一つに敬語法の有無があるが、平地方言社会にはカーストによる社会階層の違いがあり、一方山地方言社会はそれによる階層差がないという社会構造の差異がある。原(2015)では、それだけでなく、山地方言社会にはカーストとは異なる要因に支えられた独自の社会構造があり、それと密接に関連した、体系的な平地方言の敬語とは違う、人称詞を中心とした敬意表現があることが明らかにし、Hara (2018)ではそれをさらに改訂した。特に若い世代ではそれから外れる平地方言やインドネシア語の表現の使用が見られており、社会構造との関係も含めて、どのような変化であるのかをさらに観察する必要がある。
- (3) Hara (2015)では、宗教儀礼は平地方言社会とは異なり独自性が大きく、その領域では日常会話では見られない語彙や談話構造、また平地方言と類似するが同じではない神々への敬意表現が古くから認められることがわかっており、Hara (2022)でそれをさらに改訂した。近年は平地方言社会の影響は大きくなっており、祈祷の文言などにおいても変化が見られるため、引き続き観察する必要がある。
- (4) インドネシアの国家レベルの言語に関わる憲法と法令を見た上で、バリ州におけるバリ語に関わる法令から、現在のバリ語の政策がどのような方向に進んでいるのかを考察した。その結果、国家レベルの言語政策では、地方語の保護、発展、普及についても推進する姿勢を示しており、バリ州におけるバリ語に関する政策もまた、強化と拡張という方向性を明確に示していること、特にバリ語の使用を公的な領域でより広げていくことを目指していることが明らかになった。今後バリ州の言語政策がバリ語山地方言の使用にどのような影響があるのかを見る必要がある(原 2023)。
- (5) インドネシア語のとりたて表現(原 2019、Hara 2021)、インドネシア語の他動詞文(原 2022)、インドネシア語の命令文(原 2023)などのインドネシア語研究の成果は、バリ語と対照し、収集済みのバリ語とインドネシア語のコード混在の会話の分析において反映させることを検討する。

## 5. 主な発表論文等

〔雑誌論文〕 計4件（うち査読付論文 1件/うち国際共著 0件/うちオープンアクセス 0件）

1. 著者名 原真由子	4. 巻 6
2. 論文標題 インドネシア・バリ州における法令に見られるバリ語政策の方向性	5. 発行年 2023年
3. 雑誌名 外国語教育のフロンティア	6. 最初と最後の頁 79-90
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 森山幹弘、原真由子、降幡正志	4. 巻 28
2. 論文標題 コーパスデータを用いたインドネシア語応用教材の開発における課題	5. 発行年 2022年
3. 雑誌名 インドネシア 言語と文化	6. 最初と最後の頁 105-122
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 原真由子	4. 巻 43
2. 論文標題 バリ語とインドネシア語コード混在会話におけるバリ語nggih, kenten, nikaの機能	5. 発行年 2017年
3. 雑誌名 南方文化	6. 最初と最後の頁 53-59
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 原真由子	4. 巻 22
2. 論文標題 バリ語とインドネシア語コード混在会話におけるバリ語kenten, nggih, nikaの機能	5. 発行年 2016年
3. 雑誌名 インドネシア 言語と文化	6. 最初と最後の頁 21-33
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

〔学会発表〕 計13件（うち招待講演 5件 / うち国際学会 5件）

1. 発表者名 原真由子、降幡正志、森山幹弘
2. 発表標題 インドネシア語の命令文における他動詞の形態についての考察
3. 学会等名 日本インドネシア学会第54回研究大会
4. 発表年 2023年

1. 発表者名 Hara Mayuko
2. 発表標題 “Honorifics” of the Bali Aga dialect in the domain of religion
3. 学会等名 International Conference on Languages and Arts across Cultures 2022 (招待講演) (国際学会)
4. 発表年 2022年

1. 発表者名 原真由子
2. 発表標題 インドネシア語の二重目的語構文の運用
3. 学会等名 第3回OSIP記念フォーラム (招待講演) (国際学会)
4. 発表年 2023年

1. 発表者名 Hara Mayuko
2. 発表標題 Unsur Penegasan dan Pemfokusan (Toritate) dalam bahasa Indonesia: Perbesaan antara SAJA dan JUGA
3. 学会等名 Kongres Internasional Masyarakat Linguistik Indonesia 2021 (国際学会)
4. 発表年 2021年

1. 発表者名 原真由子
2. 発表標題 日刊紙Kompasにおけるインドネシア語他動詞文の運用
3. 学会等名 第52回日本インドネシア学会研究大会
4. 発表年 2021年

1. 発表者名 原真由子
2. 発表標題 インドネシア語のとりたて表現
3. 学会等名 Prosody and Grammar Festa 5
4. 発表年 2021年

1. 発表者名 原真由子
2. 発表標題 インドネシア語の『今でしょ!』: sekarang sajaとsekarang juga
3. 学会等名 第2回OSIPフォーラム(招待講演)
4. 発表年 2020年

1. 発表者名 Hara Mayuko
2. 発表標題 Unsur Penegasan dan Pemfokusan (Toritate) dalam Bahasa Indonesia
3. 学会等名 Kongres Internasional Masyarakat Linguistik Indonesia 2018 (国際学会)
4. 発表年 2018年

1. 発表者名 原真由子
2. 発表標題 インドネシア語のsajaは『だけ』だけ？
3. 学会等名 OSIP記念フォーラム基調講演（招待講演）
4. 発表年 2019年

1. 発表者名 Hara Mayuko
2. 発表標題 “Honorifics” in the usage of personal pronouns and terms of address in the Bali Aga dialect
3. 学会等名 The 1st International Conference on Local Languages---Empowerment and Preservation of Local Languages（招待講演）（国際学会）
4. 発表年 2018年

1. 発表者名 Hara Mayuko
2. 発表標題 Masalah dalam pengajaran bahasa Indonesia di universitas di Jepang dan tindak lanjutannya
3. 学会等名 Simposium Internasional --- Peningkatan Pemahaman Pendidikan dan Penelitian Keindonesiaan dan Kejepangan guna Mempererat Hubungan Kedua Negara
4. 発表年 2016年

1. 発表者名 原真由子
2. 発表標題 インドネシア語のとりたて表現
3. 学会等名 国際シンポジウム インドネシア研究と日本研究の新たな地平
4. 発表年 2016年

〔図書〕 計3件

1. 著者名 Faculty of Languages and Arts Universitas Pendidikan Ganesha	4. 発行年 2022年
2. 出版社 Faculty of Languages and Arts Universitas Pendidikan Ganesha	5. 総ページ数 85
3. 書名 Conference Book The Second International Conference on Languages and Arts across Cultures (ICLAAC)	

1. 著者名 野田尚史編	4. 発行年 2019年
2. 出版社 くろしお出版	5. 総ページ数 360
3. 書名 日本語と世界の言語のとりたて表現（担当部分：インドネシア語のとりたて表現）	

1. 著者名 I Nengah Sudipa, Ida Bagus Putra Yadnya, Made Budiarsa, I Nyoman Darma Putra	4. 発行年 2018年
2. 出版社 Udayana University Press	5. 総ページ数 800
3. 書名 Proceedings The 1st International Seminar on Local Languages “ Empowerment and Preservation of Local Languages ”	

〔産業財産権〕

〔その他〕

-

6. 研究組織

氏名 (ローマ字氏名) (研究者番号)	所属研究機関・部局・職 (機関番号)	備考
---------------------------	-----------------------	----

7. 科研費を使用して開催した国際研究集会

〔国際研究集会〕 計0件

8. 本研究に関連して実施した国際共同研究の実施状況

共同研究相手国	相手方研究機関
---------	---------